

尾崎紅葉『金色夜叉』を中心とした 文語体作品の文体について

——文末表現を手がかりに——

木川あづさ

1. 本稿の目的

本稿は、尾崎紅葉晩年の大作『金色夜叉』の文体を、文末表現という観点から、紅葉の言文一致体（「である体」）完成以前の文語体作品『伽羅枕』『三人妻』『男ごゝろ』『心の闇』と比較し、その相違点を明らかにするものである。

紅葉が執筆活動をしていた明治20年代、「書き言葉」と「話し言葉」を一致させようとするいわゆる「言文一致運動」が盛んに行われていた。二葉亭四迷の「だ体」、山田美妙の「です体」、嵯峨の屋御室の「であります体」に続いて、紅葉の「である体」と呼ばれるように、紅葉は当時の「言文一致運動」の一端を担った人物である。そして紅葉の「である体」は、後世への影響も大きいことが既に指摘されている¹⁾。言文一致体の成立という点からは、佐藤武義（2004）や中里理子（2002）の指摘があるように、紅葉の文体はしばしば取り上げられるのである。しかし、紅葉の文語体作品の文体については、中心的に取り上げられることが少ない。木坂基（1988）が雅俗折衷体の語彙という観点から『金色夜叉』を取り上げ、露伴、一葉と比較をしているが、他の作品については触れられていない。また岡本勲（1980）も語法の点から『金色夜叉』を取り上げるが、紅葉の他の文語体作品までには及んでいない。明治期に文体開拓を行った紅葉の独自の文体は、具体的な調査が及んでいない点がある。特に紅葉は「である体」確立という点から言文一致体の調査が多いのである。

そこで本稿は、明治期の「言文一致運動」に関わった紅葉が、晩年まで拘り続けた文語体²⁾について考察を加えたい。その中でも、言文一致体「である体」完成の後、再び文語体で書かれた『金色夜叉』に焦点をあて、紅葉の文語体の傾向を明らかにする。本稿は、明治期の文語体の文体について、個人の文体に焦点をあてた個別的な研究である。当時の文語体の実態を、紅葉という個

性の文体特徴から、その一端を明らかにするものである。

2. 先行研究

紅葉の文語体の文体については岡本勲（1980）の研究がある。鷗外・透谷・紅葉・鏡花・蘆花の文語体を取り上げ、助動詞を中心とした個々の文体特徴を明らかにすると同時に、「文法上許容ニ関スル事項」（明治38年文部省から発行）と語法的な観点から比較するなどの考察が見られる。

一方、紅葉の言文一致体については、中里理子（2002）が『多情多恨』に焦点をあて「文末表現・用字・用語・修辞技法」の観点から調査が見られる。また佐藤武義（2004）では、『二人女房』『隣の女』『紫』『冷熱』『青葡萄』『多情多恨』を文末表現から取り上げ、言文一致体でありながらも雅俗折衷体の文末も見られることを指摘し、言文一致体の中の「古語文末」と「近代語文末」の分布を示している。紅葉初の言文一致体『二人女房』では従来の雅俗折衷体の影響があるため、古語文末の割合が高く、その後『隣の女』『紫』『冷熱』『青葡萄』と古語文末は減少していることを明らかにしている。しかし『多情多恨』では古語文末は高率となり、「雅俗折衷体への回帰の徴候が認められる」（p136）と指摘する。しかし佐藤武義（2004）はその『多情多恨』の後の『金色夜叉』までには考察が及んでいない。また中里理子（2002）も次のように指摘する。

「多情多恨」完成後、「金色夜叉」のような雅俗折衷文体に戻った時に、言文一致文での文体特徴がどのように生かされているか、あるいは変えられているかを見ていくことも必要だろう（p760）

以上のような指摘をしながらも『多情多恨』の後の『金色夜叉』については調査がなされていない。『金色夜叉』の文体に関わる調査は、先の岡本勲（1980）で、『金色夜叉』の「つ」「ぬ」の問題、係り結びの指摘があるのみで『金色夜叉』を除く、紅葉の他の文語体作品の文体までは考察されていない。

そこで本稿は、この『金色夜叉』に焦点をあてながら、紅葉の文語体を取り上げる。『多情多恨』で「である体」を完成させながらも、翌年に再び文語体で発表した『金色夜叉』は、「である体」完成以前の文語体作品と比較し、どのような特徴が見られるのだろうか。『金色夜叉』に見られる特徴的な文末表現を明らかにする。

3. 紅葉の文体の変遷

紅葉の出世作は明治22年4月に『新著百種』に発表された『二人比丘尼色懺悔』である。作品の冒頭では紅葉が如何に文体を意識して執筆しているかが窺われる³⁾。この出世作以来、連続して短編小説を発表するが、文語体を基調とした文体であった。明治23年7月には紅葉初の長編小説『伽羅枕』が発表され、25年3月に『三人妻』、26年3月に『男ごゝろ』、26年6月に『心の闇』と文語体の長編、中編小説が続いて発表された。この間に『二人女房』(明治24年8月～25年12月)で言文一致体(但し中編の三から)を採用することもあったが、文語体作品が中心であった。紅葉の文体への意識は次の文章からも窺うことができる。

わが文は雅俗折衷の一体なるを、言文一致などゝいふ人あり。酒と白足袋と言文一致はわれ大嫌ひなれば、かくいはるゝが此上もなく口惜し、されど何とか名がなくてはと思召さば、談林文章または談林体とおほせられ度候⁴⁾。

このように言文一致体を好まない紅葉だが、言文一致体作品が目立ち始めるのは、明治26年8月の『隣の女』からである。『紫』(明治27年1月)『冷熱』(明治27年5月)『青葡萄』(明治28年9月)と続き、明治29年2月には「である体」完成作と呼ばれる『多情多恨』が発表された⁵⁾。この次の年に発表されたのが、再び地の文が文語体の『金色夜叉』である。

『金色夜叉』については、初出の読売新聞本文と、初版本の本文との異同の問題が指摘されている⁶⁾。具体的には拙稿(2007)北澤尚・許哲(2008)(2009a)(2009b)を参照されたい。『金色夜叉』の本文は膨大な異同が見られ、送り仮名、表記に止まらず『金色夜叉』の文体に直接関わるような時の助動詞の変更も確認ができる。紅葉自身の書き換え(変更)から、文体を試行錯誤し、開拓しようとしていたことが窺われるのである。『金色夜叉』について紅葉自身の次のような記述もある。

文章の方は大に LABOURED STYLE で、前に抱一庵主人も、此文章に銜気があるといふ評をしたが、実にその通りだ。実はこの小説を書き始めた時(明治二十九年)は例の言文一致が非常に勢力のあつた頃で、猫も杓子も言文一致――と騒いだ時だから、僕は言文一致以外にも、一種の文体で能く人心の機微を写すことが出来るだらうといふ野心で、実はこんな文体を創めて見たのだ。併し労多くして功少しで、骨の折れる割には面白くな

(4)

い⁷⁾。

『多情多恨』において言文一致体を試行した紅葉が、再び文語体で執筆した『金色夜叉』は、本文異同の点からみても、試行錯誤の跡が膨大に見られるのである。またこの記述から、『金色夜叉』における紅葉いう「LABOURED STYLE」「一種の文体」とは、言文一致体完成以前の文語体と比べ、具体的にはどのような特徴を持つ文体なのであろうか。このような視点を持ちつつ考察を進めたい。

4. 調査資料及び調査観点

調査対象とするのは、『金色夜叉』（明治30年1月～明治35年5月）のほか、『伽羅枕』（明治23年7月～9月）、『三人妻』（明治25年3月～5月）、『男ごゝろ』（明治26年3月～4月）、『心の闇』（明治26年6月～7月）の読売新聞に連載された文語体作品5点を対象とする⁸⁾。調査テキストは以下を使用した。

『紅葉全集2巻』（『伽羅枕』）岩波書店（1994年7月21日）

『紅葉全集3巻』（『三人妻』）岩波書店（1993年11月22日）

『紅葉全集4巻』（『心の闇』『男ごゝろ』）岩波書店（1994年1月26日）

『紅葉全集7巻』（『金色夜叉』）岩波書店（1993年12月21日）

全て岩波書店の『紅葉全集』を用いることにする。全集では『金色夜叉』に限らず、初版本を底本としながらも初出の読売新聞も参照しており、大まかではあるが初出（読売新聞）との異同についても全集の解説で取り上げ、初出の本文を考慮している点が窺えるからである。また、先述したように『金色夜叉』の初版本は、紅葉自身が手を加えていることが明らかであるため、初出（読売新聞）よりも、紅葉が目指した文体により近いともいえる⁹⁾。その点も考慮した上、初版本を底本とした岩波書店の『紅葉全集』を用いることにした。但し、『紅葉全集』を使用しながらも、調査の該当箇所（文末）にあたる部分は適宜初出の読売新聞¹⁰⁾と確認をした。用例を示す際の頁数は『紅葉全集』によるものとし、用例のルビについては、全て（ ）内に示すことにする。また、用例以外の紅葉自身の記述を引用する場合は、ルビを全て省くことにした。

具体的な調査の観点は、地の文の文末表現を調査した。そのため、『金色夜叉』の「 」で括られ口語体で書かれた会話文は取り上げない。また『伽羅枕』『三人妻』『男ごゝろ』『心の闇』のように、地の文と会話文が混在している場合も、地の文のみを抽出している。心内文に関しても全て取り上げない。

『金色夜叉』は初版本の続編以降を除き、本編（前・中・後編）を対象とした。本稿では文末表現の特に助動詞を中心に考察することにし、中でも時の助動詞と指定辞を取り上げ、それらの上接語を見ることにした。また最後に紅葉の言文一致体『多情多恨』との関連についても触れることにする。

5. 調査結果

5. 1. 文末表現全体の使用状況

調査資料全ての地の文の文末総数は、『伽羅枕』468、『三人妻』1094、『男ごゝろ』406、『心の闇』308、『金色夜叉』1378である。それぞれの文末表現を次のように分類した。

- a 体言終止
- b 用言終止
- c 副詞終止
- d 助詞終止
- e 助動詞終止

大きくわけてa～eに分類することができる。文末の総数からそれぞれa～eまで各資料における割合は次のようになった。まずはここで大まかな傾向を確認しておきたい。

【表A】をみると、まず調査資料全て、e助動詞終止が高い割合を占めている。a体言では、『伽羅枕』『三人妻』『男ごゝろ』『心の闇』が10%以上の割合であるのに対し、『金色夜叉』はわずか0.4%という低さである。また、b用言（動詞・形容詞類）終止も『金色夜叉』は4.7%と調査資料の中で最も低い割合を示している。その一方、e助動詞終止は、他と較べて89.6%と高い割合を示

【表A】

	a 体言	b 用言	c 副詞	d 助詞	e 助動詞
伽羅枕	12.2%	17.5%	0%	2.1%	68.2%
三人妻	16.4%	11.4%	0.2%	4.2%	67.8%
男ごゝろ	12.1%	8.6%	0%	4.4%	74.9%
心の闇	14.6%	17.9%	0.3%	5.5%	61.7%
金色夜叉	0.4%	4.7%	0.1%	5.2%	89.6%

している。全資料を通してe助動詞終止の割合は高いが『金色夜叉』の場合は特に、a体言、b用言、c副詞、d助詞全てが10%未満と低く、それに代わるようにe助動詞終止が他の資料よりも高い割合であることが窺える。また全体を通してみるとc副詞d助詞は割合が低い。また、b用言の使用頻度は10%を超える資料もあるが、その具体的な使用については、資料間で目立った差は見られない。特に副詞については使用例が僅かのため考察するに及ばない。ここでは、用言と助詞の例を簡潔に取り上げることにし（【表B】【表C】参照）、体言と助動詞は後で詳しく考察を加えることにする。

【表B】 用言

	伽羅枕	三人妻	男ごゝろ	心の闇	金色夜叉
動詞サ変 する【口語】	1	4	1	2 2	16
動詞ラ変	14	31	15	16	22
動詞	28	37	7	24	13
形容詞	39	50	12	11	14
形容動詞		3			
用言合計	82	125	35	55	65
文末総数	468	1094	406	308	1378
%	17.5%	11.4%	8.6%	17.9%	4.7%

【表B】【表C】の下にはそれぞれ用言合計（【表B】）、助詞合計（【表C】）を示し、その下に各作品の文末総数を、「%」の欄には「用言（または助詞）の合計÷文末総数×100」によって算出された、用言、助詞使用の割合である。【表B】の用言は、サ変動詞¹¹⁾、ラ変動詞、それらを除く動詞（「～といふ」「～を待つ」「～を伝ふ」等）、形容詞（「～無し」「～難し」「煩（うるさ）し」等）が見られ、形容詞の場合は特に「～無し」が目立つのは全資料とも共通している。また【表C】助詞については、使用に多少ばらつきがある。個別的に触れておくと、副助詞「のみ」は全資料共通して一定量見られる。「かし」は『三人妻』に13例あるが他の資料の使用は少ない。『三人妻』の「かし」は「このやうなお腹を抱えて母様に会ふことぞかし」（p166）といった「ぞかし」の例であり「かし」13例中9例がこの「ぞかし」である¹²⁾。また「や」については『伽羅枕』『三人妻』には「珍膳五十人前も咄嗟の中に調ふは此家一の名物なりとかや。」（『三人妻』p15）といった「と+か+や」の形式の使用が見られ、

【表C】 助詞

	伽羅枕	三人妻	男ごゝろ	心の闇	金色夜叉
を					4
に	1				1
は				1	
も	1	2	3		5
か	3	6	1	1	16
や		1			5
ぞ					
が		1		1	1
て					
で					1
ど		1			
ながら			1		1
つつ					
のみ	3	8	8	7	28
まで				1	
やら		2		1	
ばかり	1	6	3	1	
よ					6
ものを		1			
かな	1	5			2
かし		13	2	4	
とよ					1
助詞合計	10	46	18	17	71
文末総数	468	1094	406	308	1378
%	2.1%	4.2%	4.4%	5.5%	5.2%

その一方『金色夜叉』は、「とかや」の例はなく、目立って使用されるのは、打ち消し助動詞「ず」を伴った「欧羅巴の女子職業に自営せる人などならずや」(p251)の「ず+や」である。このように資料により使用される助詞が多少異なっている事実もあるが、使用頻度が全体的に低いため、資料間による大きな差は見出せない。本稿で特に焦点をあてる『金色夜叉』と、他の資料との相違が顕著な体言終止と助動詞終止を次から詳しく考察する。

5. 1. 1. 体言終止

『金色夜叉』は同じ文語体の地の文でありながら、文末表現に異なった傾向が見られる。その傾向の一つとして体言止めがあげられる。

- お花の顔を見ては否味（いやみ）たらしき微笑（わらひ）の目元（めもと）（『伽羅枕』p34）
- 金泥精描（きんでいせいべう）の騰龍（のぼりゝう）は目貫（めぬき）を打つたるかとばかり雲間に耀（かゞや）ける横物の一幅（いつぷく）（『金色夜叉』p179）

具体的に体言止めの実数を示すと【表D】の通りである。表の左側には体言止めの種類を記した。それに対する各資料の使用回数を実数で示し、最後に体言止めの合計数と文末総数を示した。一番下に記したのは「体言合計÷文末総数×100」によって算出された、体言使用の割合である（以下【表E】も同じ要領で算出している）。

【表D】

	伽羅枕	三人妻	男ごゝろ	心の闇	金色夜叉
名詞	53	153	40	41	5
名詞（形容詞語幹＋さ）	2	19	7	2	
名詞（形容動詞語幹＋さ）	2	5	2	2	
その他（～ざま、～ら）		2			
体言合計	57	179	49	45	5
文末総数	468	1094	406	308	1378
%	12.2%	16.4%	12.1%	14.6%	0.4%

『金色夜叉』を除く資料は「形容詞語幹＋さ」「形容動詞語幹＋さ」によって名詞化した例が見られる。『三人妻』については既に中里理子（2002）に「形容詞を名詞化したものが目立ち、用言の終止形ではなく体言止めにして余情をもたせるという旧文体の要素が色濃い」（p766）と指摘がある。本稿で調査した結果、このような例は『三人妻』に特に顕著であるが、他の『伽羅枕』『男ごゝろ』『心の闇』にも見られることが分かった。具体例は次の通りである。

- 遽（にはか）に鼻の詰（つ）まりたる不快（こゝろわる）さ。（『心の闇』p257）
- 今日まで尋ねて見えぬ乳母の病気の心元（こゝろもと）なさ。（『男ごゝろ』p151）

『金色夜叉』を除く資料は体言終止の頻度が高いが、形容詞・形容動詞の名詞化がさらに体言終止の割合を高くしていることが窺える。【表 D】を参照して明らかなように、『金色夜叉』の体言止めは0.4%と低く、余情・余韻の効果をもつ体言止めが少ないことが窺える。

5. 1. 2. 助動詞終止

先に示した全体の割合（【表 A】）のどの資料においても、助動詞が高い割合を占めていた。特に本稿ではこの助動詞に注目してみたい。具体的な視点としては、時の表現である時の助動詞、また指定辞の2つに分けて考察する。【表 E】は助動詞全体の使用数である。（※連体形終止の場合もこの表に含めてい

【表 E】

	文末助動詞	伽羅枕	三人妻	男ごころ	心の闇	金色夜叉
受身・尊敬	る らる		1 1			2
使役	しむ	1				1
打消	じ ず	1 39	151	2 70	5 38	1 63
時	き けり つ ぬ たり り	13 44 1 86 22 3	22 94 274 28 10	45 49 68 8 7	17 21 2 51 10 5	101 86 55 227 185 221
推量	む まし けむ らむ らし べし めり まじ	 22 2	4 1 43 1	2 1 2 18 1	1 10 	11 2 2 38 1
願望	たし			1		
指定	なり たり	70	100	27	30	234 1
比況	ごとし ようだ【口語】	15	11 1	4		4
	助動詞合計	319	742	304	190	1235
	文末総数	468	1094	406	308	1378
	%	68.2%	67.8%	74.9%	61.7%	89.6%

る。例えば、「き」の連体形「し」が文末に見られた場合、この表の「き」の使用数に含まれている。) 全資料通して時の助動詞「き・けり・つ・ぬ・たり・り」の使用が顕著である。また指定辞「なり」も全資料に共通して多用されている。中でも『金色夜叉』の時の助動詞は、助動詞全体の合計1235例中、875例が時の助動詞であり、『金色夜叉』の助動詞の合計(1235例)の、71%を時の助動詞が占めていることが分かる。また、完了の助動詞「り」については、『金色夜叉』の中では頻度の高い助動詞であるが、他の資料をみると、『伽羅枕』3例、『三人妻』10例、『男ごゝろ』7例、『心の闇』5例と少数であり、『金色夜叉』との差は大きい。「り」は「たり」よりも上接語に制限(四段とサ変)があるにも関わらず、このように高い頻度で使用されるというのが『金色夜叉』の一つの特徴である。「り」については具体的に後述する。また「つ」の用例数を見ると、これも同様に『金色夜叉』に目立って使用されており、その点に関して『金色夜叉』の「つ」の問題を岡本勲(1980)は取り上げ、『金色夜叉』の「つ」は接続助詞「て」に近い役割を担っていたと指摘する。

5. 2. 時を表す助動詞

助動詞の中でも特に文末に多用される時の助動詞を具体的に上げてみる。

① 時を表す「き」と「けり」

先の【表E】で「き」と「けり」の実数をみると、『金色夜叉』のみ「けり」よりも「き」の使用が多いことが分かる。『金色夜叉』を除く『伽羅枕』『三人妻』『男ごゝろ』『心の闇』は「き」よりも「けり」の使用の方が多い¹³⁾。『金色夜叉』に「き」が101例も見られるという点に関しては「ざり+き」「なり+き」など固定的な形式を幾度も繰り返して使用しているためである。「き」と「けり」の使用実態について、さらに上接語から考察していく。

② 時の助動詞「き」の上接語

まずは終止形「き」が文末にくる例をあげてみる。

- 舞子(まひこ)の姿を写して往来(ゆきゝ)の足を止(とゝめ)、魂入(たましひいり)たる京人形と誉めぬ者はなかりき。(『伽羅枕』p8)
- これほどの女無くてはと、はや戯(ご)れかゝれば、手にしたる蘆柄(あしえ)団扇(うちは)にはた――と鼻頭(はなさき)を扇(あふ)がれ、呼吸(いき)の止まるほど嬉しかりき。(『三人妻』p63)
- お京が松崎の塾に入学せしは、東京に移りてより三月(みつき)ばかりの後(のち)なりき。(『男ごゝろ』p157)
- 天(そら)へ梯子(はしご)掛(か)けて星を拾(ひろ)ひたき慾(よ

く)、及(およ)ばぬことのなほ悔(くや)しかりき。(『心の闇』 p263)

- 決して彼が所望(のぞみ)の絶頂(ぜつちやう)にはあらざりき。(『金色夜叉』 p21)

時の助動詞「き」の上接語を資料ごととまとめてみると次の【表 F】のようになる。以下の表は、終止形「き」が文末に来たもののみを取り上げている。そのため【表 E】で示した数値と異なるところがある。連体形「し」については後述するためここでは除いた。

まず、先の①で述べた通り、『金色夜叉』の「き」の合計数は他の資料と比べて多い。上接語を見ると、『伽羅枕』『三人妻』『男ごゝろ』『心の闇』は、形容詞に接続する場合が最も多い。また『伽羅枕』の形容詞 7 例は全て「～なかりき」の例である。そして『三人妻』 6 例は、上接語がすべて形容詞である(後述するが『三人妻』は連体形終止「し」になると、上接語は形容詞とは限らなくなる)。また『心の闇』も形容詞 4 例が多い。「切なかりき」「可笑しかりき」「嬉しかりき」など形容詞カリ活用に接続している。一方、『金色夜叉』の上接語を用例数の多い順に見てみると、43 例の「なり+き」、40 例の「ざり+き」続いて「たり+き」と助動詞が上位を占める。形容詞は 3 例である。

また、『金色夜叉』の「なり+き」43 例、「ざり+き」40 例は多いが、「ざり+き」は否定表現において使用される固定的な表現である。「なり+き」について見ると、「連体形+なり+き」が大半であり、「足音なりき」(p55)のような「名詞+なり+き」の例は僅かである。

岡本勲(1980)では、森鷗外の文体研究を助動詞から考察されている。その中で次のような指摘がある。

終止形「き」の上接語は、近代文語、殊に所謂普通文的な文語では、特定の用言に限定せられる傾向が鞏固で ざりき・なりき・ありき・形容詞+き(例「なかりき・甚しかりき」)など、謂わば、固定的熟合に近い表現であって、一般の動詞を承ける「従ひき」とか「見き」とかの形は、余り使用せられない。(p 9)

としている。この点について、本稿の調査でも動詞に直接接続する例は僅かだった¹⁴⁾。しかし岡本勲(1980)は次のように続けている。「文学作品など、作家の個性的文章では、必ずしもそうとは云えない。」(p 9)とし、具体的には、森鷗外の『日清役自紀』では動詞に接続する場合、ラ変「あり」の「ありき」のみであるが、『即興詩人』では上接語にばらつきが見られ、動詞も「あり」のみでなく、「湿しき」「煮き」「迎へき」「愛しき」「見き」「用ゐき」などが見られることを指摘している。さらに上接語が、なり、ざり、あり、形容詞

【表 F】

「き」の上接語	伽羅枕	三人妻	男ごゝろ	心の闇	金色夜叉
動詞	1				3
サ変					1
ラ変					1
形容詞	7	6	8	4	3
助動詞 ず（ざり＋き）	2		5	3	40
助動詞 しむ（しめ＋き）					1
助動詞 つ（て＋き）					1
助動詞 ぬ（に＋き）	1				1
助動詞 たり（たり＋き）			1		5
助動詞 なり（なり＋き）			3		43
合計	11	6	17	7	99

のように限定されるか否かの問題について次の指摘がある。

『日清役自紀』では限定があり、『即興詩人』では限定がないと云う点の比較から考えると、実用的普通文では限定があり、文学作品や小説では限定がないと云う風に見られるかも知れない。そして、それは当時の普通文の一般的な線であるけれども、小説でも『不如帰』など限定のあるものもある所から考えると、内容が報告書であるか、小説であるかによるのではなく、寧ろ、書手が普通文的な線に拘束せられているか否かにかかっているのであらう。(p11～12)

以上の指摘から、森鷗外の『日清役自紀』は報告書であるので、岡本勲(1980)の考察では普通文として、『即興詩人』を文学作品としている。本稿で取り上げている資料はすべて文学作品である。しかし、全資料が「助動詞＋き」か「形容詞＋き」が中心であり（「動詞＋き」の例は少々見られるが）、上接語が限定されているようである。岡本勲(1980)は森鷗外の文体からの考察だが、この考察に拠るならば、紅葉は普通文的な線に拘束されていたのか、あるいは少なくとも語法的な観点から見れば規範的であったのだろうか。

③ 時の助動詞「けり」の上接語

次に「けり」の上接語を見る。

- とても我手に合ふものならずとて、折檻（せつかん）は五六度にして廃（や）めけり。（『伽羅枕』 p64）
- 冥利（みやうり）には尽きまじき攫利（まうけ）あり、と直様（すぐさま）雪村の別荘へおつ飛（と）ばしけり。（『三人妻』 p69）

- 此一間（このひとま）は夜のまゝにして忍足（しのびあし）に立出（たちい）でけり。（『男ごゝろ』 p141）
- 花々（はな―）しく筑居（つくゐ）の門（かど）に乗込（のりこ）みけり。（『心の闇』 p296）
- 思ひ直せども貫一が腑には落ちざるなりけり。（『金色夜叉』 p114）

「けり」についても、「き」同様『金色夜叉』に異なった傾向があった。『伽羅枕』『三人妻』『男ごゝろ』『心の闇』は大半が動詞に直接接続する例であるのに対し、『金色夜叉』は多くが助動詞に接続し、複合助動詞の形式であることが分かる。まず具体的に【表 G】を見ると、動詞接続『伽羅枕』22例『三人妻』47例『男ごゝろ』20例『心の闇』10例である。それに対して『金色夜叉』は3例のみである。『金色夜叉』に最も多用されている例は助動詞「なり」（54例）に接続した「なりけり」である。固定的な表現を高い頻度で使用していることが分かる。「けり」の直前に指定辞「なり」をおくことで、物事を断定する要素を付加している。「～なりけり」とすることで、より説明的な印象を与える文末の表現になっている。その一方『伽羅枕』『三人妻』『男ごゝろ』『心の闇』には「なりけり」の例は僅かしかなく、『金色夜叉』の説明的な文末表現を際立たせる結果となった。

以上、②③と「き」「けり」の上接語の観点からまとめた。「き」については

【表 G】

「けり」の上接語	伽羅枕	三人妻	男ごゝろ	心の闇	金色夜叉
動詞	22	47	20	10	3
サ変	2	1			
ラ変		1	1		1
形容詞		2			1
助動詞 る（れ+けり）	1	6			1
助動詞 らる（られ+けり）		1			
助動詞 す（せ+けり）	2		1	1	
助動詞 ず（ざり+けり）		10	8	4	7
助動詞 つ（て+けり）	1	1	2		5
助動詞 ぬ（に+けり）		1	1	1	4
助動詞 たり（たり+けり）		9	6	3	
助動詞 なり（なり+けり）	5	2	3	1	54
接尾辞がる（がり+けり）	2	2			
合計	35	83	42	20	76

『金色夜叉』以外は、量的に少ない点もあるが形容詞に接続する例が多く見られ、『金色夜叉』は、最も「なり+き」の例が多かった。「けり」については、『金色夜叉』を除く資料は動詞に直接接続する例が目立ち、『金色夜叉』は助動詞接続が多く、中でも「なりけり」が目立った。共通している点は『金色夜叉』の指定辞「なり」接続の多さである。「なり+き」「なり+けり」と固定的な表現、指定辞「なり」に接続した文末表現が目立つのである。『金色夜叉』は「なり+き」「なり+けり」のように接続し、叙述的、あるいは客観的な描写態度が文末表現から窺える。

④ 連体形終止「し」「ける」

先の【表E】で示した実数は、終止形終止も連体形終止も含めた数字である。調査では、終止形終止ではない連体形終止の例も多く見られた。ここでは、連体形終止「し」と「ける」を取り上げる。

- 此事（このこと）いつか素六（そろく）の耳（みみ）に入（い）れども、聞（き）かぬ顔（かほ）にて何（なん）とも言（い）はざりし。（『三人妻』p70）

これは『三人妻』の連体形終止「し」が文末にくる例である。先の【表E】では『三人妻』の「き」は22例としているが、このうち終止形終止の例は『三人妻』は6例しか見られていない。22例のうち16例は、連体形終止「し」の例である。『三人妻』の「し」の多用は次の表で明らかである。「き」の方は②で述べたように上接語が全て形容詞であることが分かる。一方「し」の場合は必ずしも上接語が形容詞ではなく、助動詞、動詞にも接続している。

また、文末に終止形終止「き」よりも連体形終止「し」を多用する作品に『男ごゝろ』がある。『男ごゝろ』は終止形終止「き」17例であるが「し」については28例も見られる。『三人妻』同様「し」の多用が目立つ。続いて『心の闇』も「き」は7例だが、「し」は10例と、これも「き」よりも多用されている。『金色夜叉』と『伽羅枕』は文末に「し」の使用はそれぞれ2例であり、多くはない。また『金色夜叉』の「し」は2例見られるが、このうちの1例「聞えし」は、初出の段階では「～ぞ聞えたる」であったことが確認できている。初出ではさらに「し」の使用が少なかったことが窺える。しかし、全資料を通して文末にあえて連体形終止「し」を使用する例があることも事実であった。

『三人妻』『男ごゝろ』『心の闇』については、文末に終止形終止「き」はむしろ使用が少なく、連体形終止「し」の方が量的に多い。この「し」の多用について、明治38年文部省告示「文法上許容ニ関スル事項」第三項に次のように

『三人妻』『き』上接語 用例数

形容詞（なかり＋き）	3
形容詞（切なかり＋き）	1
形容詞（嬉しかり＋き）	1
形容詞（可笑かり＋き）	1
合計	6

『三人妻』『し』上接語 用例数

助動詞ず（ざり＋し）	5
助動詞なり（なり＋し）	5
動詞（いひ＋し／納（き）き＋し）	2
形容詞（可笑かり＋し）	2
形容詞（多かり＋し）	1
形容詞（なかり＋し）	1
合計	16

記されている。

三、過去の助動詞「き」の連体言の「し」を終止言に用ゐるも妨なし

年代的にはこの許容事項よりも早い資料ではあるが後に許容せざるを得ない程度に「し」が文末に用いられていたことが窺がえる。さらに、西鶴模倣体¹⁵⁾といわれる『三人妻』が「し」を多用している点について、西鶴の文体特徴について長友千代治（1993）は「係結びの破格があり、特に時の助動詞「き」「けり」の係助詞を伴わぬ連体形止めが多い。」（p232）¹⁶⁾と指摘する。『三人妻』についていえば、連体形「し」（16例）は全て係り助詞を伴わない「し」である。西鶴模倣体とは内容的な点も含まれている可能性はあるが、『三人妻』は「し」を多用しており、少なくともこの点に関しては西鶴の文体との共通点はあるといえる。

続いて同じく連体形終止の「ける」の使用についてである。

○ 辞（ことば）よりは先（ま）づ汗ぞ出（い）でける（『男ごゝろ』p158）

○ 偏（ひとへ）に頼み聞ゆるにぞありける（『金色夜叉』p261）

先述したように終止形終止「けり」は、『金色夜叉』を除く資料には「き」よりも多用されており、その中で連体形終止「ける」は終止形終止「けり」と比べて少ない。その多くが文末には終止形終止がくることが分かる。連体形終止の用例数は次の通りである。『伽羅枕』9例、『三人妻』11例、『男ごゝろ』7例、『心の闇』1例、『金色夜叉』9例である。「ける」の上接語を見ると、『伽羅枕』では「動詞＋ける」が多く、『三人妻』では「動詞＋ける」「たり＋ける」「なり＋ける」、『男ごゝろ』では「動詞＋ける」が多い。これに対し『金色夜叉』は、連体形終止「ける」で終わる9例中8例は、「ぞ…ありける」のラ変に接続するパターンである。「ぞ…ありける」という固定的な表現を多用する文末形式の傾向が窺える。

また「し」「ける」を含めた連体形終止という点から『金色夜叉』だけを取り上げてみる。本稿で対象とした前編～後編までの間で見てみると、連体形終

止は全体で26例見られる。そのうち25例が中編と後編に見られることに注意したい。前編は僅か1例なのである。この点については「し」「ける」だけでなく、その他の連体形終止の例も含めて以下の表を参照されたい。

品詞	該当箇所	前編	中編	後編
助動詞	ける		4	5
	し		1	1
	たる		4	2
	なる		1	1
	べき	1	3	1
ラ変	～侍る			1
形容詞	よき		1	
	合計	1	14	11

文末が連体形終止で終わるのは「中編」「後編」に偏るということが窺われる。

⑤ 多用される「り」

『金色夜叉』が他の資料と異なった傾向を示した結果の一つに、「り」の多用もあげられる。ここでは『金色夜叉』の「り」について触れておく。

「り」は『金色夜叉』を除く資料に僅かしか見られず、『金色夜叉』の使用が際立つのである（先の【表E】参照）。そもそも「り」は上接語に限定があり、高い頻度で用いられにくいように考えられるが、『金色夜叉』の場合は、使用が顕著である。また後述するが（5.3指定辞「なり」）文末に指定辞「なり」が用いられる場合、その上接語として「り」連体形「る」に「なり」が接続する「る＋なり」が多く見られるのである。その点からも「り」は終止形のみ多用ではないことが窺われる。岡本勲（1982）は、森鷗外の作品から「たり」と関連づけて次のように指摘している。

鷗外が軍医として公務で執筆した『日清役自紀』『兵役篇兵餉篇』『第二軍軍医部長臨時報告』『明治三十七八年戦役陸軍衛生史抄』などでは「り」が相対的に多く、就中、従軍中に書かれたものではなほさらである。一方、これに比し、文学作品では概して「たり」の比重が相対的に大となる。（p 115）

軍医として執筆した報告書では「り」の多用が確認され、文学作品では「たり」の使用が述べられている。また、新聞記事をジャンルごとに分類し「り」

「たり」の使用を確認されているが「軍事関係の記事の或る一群の記事では、「り」の使用がとりわけ多い」(p126)との指摘がある。また作家個人の文体として森鷗外『即興詩人』の「り」について次のような指摘もある。

時として連続的集中的に用ゐる事によつて危機的な場面の緊張をもりたてたり、宗教的儀式のあらたまつた襟を正すやうな雰囲気を強調したりしてゐる。これは普通文にある「たり」と「り」との関係ないしこの関係の中に存在する「り」のもつニュアンスを生かし、小説の筋の展開や場面の転換を鮮かにする一つの効果的な技法となつてゐる。殊に或るクライマックスを引き立たせて、引き締めた表現とするに役立つてゐる。(p115)

『即興詩人』から「り」の効果的な使用があげられている。また『金色夜叉』の「り」については、本稿でも「り」の多用が明らかになったように、岡本勲(1982)も「り」は「軍事記事並みである。」(p112)としその多用を指摘、さらに『金色夜叉』について「紅葉の文では或る場面に「り」を集中使用する事によつて何らかの表現効果をかもし出すと云ふ事は全々なされてゐない。おしなべて「り」が多いと云ふだけである」(p112)と指摘している。

指摘の通り少なくとも『金色夜叉』の「り」はある場面での集中使用という見方は出来ないが、初出→初版本の過程において、変更が目立つのも、この「り」なのである¹⁷⁾。つまり初出の段階で「ぬ」「たり」あるいは「けり」で表現されていたところが「り」に変更されているのである。書き換えられているという点で、単純に「り」を多用していたという訳ではなく、意図的な変更とも考えられる。

以上、ここまで時の助動詞「き・けり」「り」を具体的にあげてきた。『金色夜叉』と他の資料の量的な差をみると、『金色夜叉』のみ「けり」よりも「き」が多く、それ以外の資料は「き」よりも「けり」が多用されていた。また「り」は『金色夜叉』にのみ多用される文末表現であつた。連体形終止「し」は『金色夜叉』に例が少ないのに対し、『三人妻』『男ごゝろ』『心の闇』では終止形「き」よりも多用している。「ける」は『金色夜叉』に「ぞ…ありける」という固定的な表現の使用が目立った。

上接語からみた場合、『金色夜叉』は「なり+き」「ざり+き」と複合助動詞として「き」が多用されているが、他の資料は、形容詞に接続する例が多かつた。「けり」について『金色夜叉』は多くが「なり+けり」の例であるのに対し、他の資料は多くが直接動詞連用形に接続するものであつた。共通点は、「なりき」「なりけり」とあるように『金色夜叉』は指定辞の「なり」が多いと

いうことである。これも『金色夜叉』の文体特徴の一つといえる。ここでは上接語としての「なり」であるが、次に文末表現の指定辞「なり」を見ることにする。

5. 3. 指定辞「なり」

○ 小鶴（こつる）月盈（つきみ）ちて生落せしは玉を欺く女子（をなご）
なり。（『伽羅枕』p6）

○ 紳士は彼等の未だ會（かつ）て見ざりし大さの金剛石を飾れる黄金の指環を穿（は）めたるなり。（『金色夜叉』p9）

指定辞は、先の【表E】にあげたように全資料に満遍なく使用されている文末表現である。それらが全て同じように使用されているのだろうか。接続の観点から、「なり」の上接語を見てみたい。指定辞「なり」の上接語を以下の表にまとめた。

指定辞「なり」の上接語として最も予想されうる体言、名詞類は全資料に、一定量みられる。資料ごとに表の数値の高いところに注目してみると、『伽羅枕』『三人妻』『男ごゝろ』『心の闇』が、名詞類に接続する例が最も多いのに対し、『金色夜叉』は名詞接続も見られるが、助動詞に接続する場合が最も多いということが分かる。『伽羅枕』『三人妻』『男ごゝろ』『心の闇』は、助動詞接続が10例以下であるのに対し、『金色夜叉』は130例と高使用である。『金色夜叉』の助動詞接続130例は、他の資料との差が顕著である。また割合から見ても『金色夜叉』は名詞接続が19.5%と低く、全体の半分以上が助動詞接続（56.3%）である。『金色夜叉』の助動詞接続をさらに詳しく見てみると、最も「なり」に接続する例が多いのは、「鳴沢は始めて此女に注目（ちうもく）せるなり」（p245）のような助動詞「り」の連体形の例である。接続の頻度の高い順にまとめてみると次のようになる。

「り」（る＋なり）58例／「たり」（たる＋なり）23例／「ず」（ざる＋なり）20例／「き」（し＋なり）18例／「けり」（ける＋なり）5例／「る」（るる＋なり）2例、その他、「ごとし」「しむ」「べし」「らる」が1例ずつ見られる。

このように「る＋なり」「たる＋なり」「ざる＋なり」「し＋なり」「ける＋なり」と助動詞の複合用法に高い使用が目立つのである。中でも「り」の連体形「る＋なり」が最も多い。この「り」については、【表E】の助動詞全体の使用からも分かるように『金色夜叉』の中で多用されている文末だった。ここでは、指定辞を取り上げたが「り」は終止形終止のみでなく、連体形としても多く用

「なり」の上接語	伽羅枕	三人妻	男ごゝろ	心の闇	金色夜叉
名詞類(代名詞・形式名詞)	49(71.0%)	81(81.8%)	18(66.7%)	24(82.8%)	45(19.5%)
形容動詞類	5	4	2	1	1
動詞類(サ変ウ変含む)	8	3	1	2	40
副詞				1	1
助動詞類	3(4.3%)	5(5.1%)	3(11.1%)		130(56.3%)
助詞類	3	4	3	1	13
接尾辞(げ・ぶり・ども)	1	2			1
合計	69	99	27	29	231

(注：表は「なり」の終止形のための例である。)

いられていることが窺える。『金色夜叉』の指定辞「なり」の助動詞接続について取り上げたが、他の作品の数少ない例を見てみると次のようである。

- 呼慣(よびなら)はせしなり(『伽羅枕』p48)
- 何のかのと雑費を見積りたるなり。(『三人妻』p41)
- お京は此寺(こゝ)には来(きた)らざるなり(『男ごゝろ』p186)

となり「し＋なり」「たる＋なり」「ざる＋なり」が見られる。ところが『金色夜叉』に最も多い「る＋なり」の例は皆無である。紅葉が執筆した中でも近い年代の資料でありながら、また地の文が文語体という共通点を持ちながらも『金色夜叉』は、文体に重要な要素である指定辞の上接語の様相が、他の資料と異なっていることが窺える。

以上指定辞について、具体的に考察した。その結果、同じ文語体の地の文でありながら『金色夜叉』の文体は他の文語体と大きく異なる点が見られた。『金色夜叉』の指定の助動詞「なり」は、直接名詞につかず、助動詞の連体形を伴った「る＋なり」「ざる＋なり」「たる＋なり」の表現が多く見られる。一方『伽羅枕』『三人妻』『男ごゝろ』『心の闇』は直接名詞に接続する例が多かった。どのような理由から相違が見られるのだろうか。『金色夜叉』の一年前、紅葉は『多情多恨』において言文一致体の「である体」を完成させる。このことが『金色夜叉』の文体に関わりを持つかどうか、次にその点を詳しくみていく。

6. 言文一致体『多情多恨』との関連

言文一致体『多情多恨』は、本稿で取り上げた文語体作品とは異なり、会話文、地の文ともに口語体で書かれている。特に焦点をあてるべき所は「である体」と呼ばれるように、地の文の文末「である」である。実際に「である」の例を見ると「益（ます―）類さんの忘れられぬ所以（ゆゑん）である」（p97）のような例がある。しかし特に目立つのは「怨めしさうに視（み）たのである」（p17）「否応（いやおう）無しに引出さうと考へたのである」（p29）のように、準体助詞を介して「である」が接続する「の＋である」の形で用いられている。「名詞＋である」は少なく、上に活用語を伴うことが分かる。

既に中里理子（2002）では、『多情多恨』は『『である』・『た』・用言の終止形など、文末に何らかの叙述姿勢を明確にして記す文体を目指していたらしいことが窺える』（p766）と指摘がある。また次の指摘もある。

紅葉が選び取った基本的文末「である」は、会話には決して表れない文末であり、多く「のである」の形を取り、説明的・解説的な文章を可能にする文末であった。紅葉は「である」を基調として、用言の終止形、「ている・てある」、「た」をバランスよく使用する言文一致の文章を「多情多恨」で示して見せた。（p761）

5.3「指定辞」まで『金色夜叉』を他の文語体と比べてきた。その中で助詞終止や用言終止に大差はなかったが、助動詞の使用、またその上接語には相違があった。本稿では『多情多恨』の詳細な調査は行わなかったが、筆者が概観した所、「～のである」や「～ている」の多さは確認できる。『金色夜叉』をこの『多情多恨』と比較するとどうであろうか。中里理子（2002）に『多情多恨』の文末の「叙述姿勢」（p766）の指摘があるが、『金色夜叉』の説明的な文末表現と重なる点がある。『多情多恨』の「である」は、活用語に接続するという点においては『金色夜叉』の「なり」と類似しているようである。また『多情多恨』に「ている」が多用されている点については、「ている」の意味をあらわす『金色夜叉』の「り」の多用とも類似している。

『金色夜叉』は本稿の調査で言文一致体完成以前の文語体作品と相違点があげられ、その一方で言文一致体との共通点も見出せる。中里理子（2002）は『多情多恨』の特徴の一つに「名詞止めが地の文で少なくなっているのも特徴である。」（p767）と指摘している。この点においても体言止めの割合が極端に低い『金色夜叉』の傾向の一つと重なる。『金色夜叉』は、文体の種としては

言文一致体ではなく、地の文が文語体であり、雅俗折衷体の類に入るため、かつての文体に戻ったとも取れるが、むしろ文末表現という観点からは、以前の文語体と隔たりをもち、言文一致体の流れを継承する（しかし言文一致体ではない）、新しい文体、紅葉いう「一種の文体」といえるのではないか。

7. 『金色夜叉』と『伽羅枕』『三人妻』『男ごゝろ』『心の闇』の文体

ここまで『金色夜叉』を含む紅葉の文語体作品を中心に文末表現を明らかにした。その中で、特に『金色夜叉』が『伽羅枕』『三人妻』『男ごゝろ』『心の闇』と異なった傾向を示した点を以下にまとめてみる。

- ① 『金色夜叉』は体言止めが少ない（0.4%）。
- ② 助動詞終止の割合が特に高い。
- ③ 他の資料は、時の助動詞「き・けり」を比べた場合「けり」の使用が多いのに対し『金色夜叉』は「き」の使用の方が多い。
- ④ 助動詞「き」の上接語が、4作品は「形容詞＋き」が目立つのに対し、『金色夜叉』は「ざり＋き」「なり＋き」と複合助動詞の形式である。
- ⑤ 助動詞「けり」の上接語が、4作品は「動詞＋けり」を多用するのに対し『金色夜叉』は「なり＋けり」を多用する。
- ⑥ ④⑤の傾向から、『金色夜叉』は指定辞「なり」が複合助動詞としても多用されていることが明らかである。
- ⑦ 指定辞「なり」について、他の資料は「名詞＋なり」が多用されているのに対し『金色夜叉』は19.5%と使用は低く、「助動詞＋なり」が半分以上（56.3%）である。
- ⑧ 他の資料が完了の助動詞「り」の使用が僅かであるのに対し『金色夜叉』は多用されている。また「り」は指定辞「なり」の上接語にも多く登場（「る＋なり」）し、この「る＋なり」は他の資料には見られない。

以上、①～⑧まで簡潔に示したが、特に異なる点は、体言止めの少なさ、複合助動詞の多用、その中でも指定辞「なり」の多用で「なりき」「なりけり」が文末に見られることである。④⑤⑥⑦からも窺えるように、『金色夜叉』の指定辞は注目すべき点である。「なりき」「なりけり」と文末におくことで、地の文に説明的な要素を付加している。また連体形終止では、『金色夜叉』の中編後編に使用が偏ることも明らかになった。

『金色夜叉』と他の4作品の傾向を述べてきたが、『金色夜叉』はそもそも

『伽羅枕』『三人妻』『男ごゝろ』『心の闇』と違いがある。『金色夜叉』は、会話文に「 」が付されているのに対し、他の4作品では会話文が「 」で区切られていない。『金色夜叉』は「 」があることで地の文と会話文が明確に分けられている。このために他の資料と異なる傾向が見られたのだろうか、という点が一つ考えられる。しかし、同様に「 」もしくは《 》で会話文と区別されている紅葉の他の文語体作品を見たが『金色夜叉』の文末に見られるような特徴的な傾向は見られなかった¹⁸⁾。『金色夜叉』が他の文語体作品と一線を画す理由は、言文一致体という文体試行を介したためか、それとも紅葉いう「一種の文体」「LABOURED STYLE」の完成形なのか、断定することはできないが、本稿は他の4作品との相違点の実態を明らかにすることができた。

また、『金色夜叉』に見られる特徴的な文末の背景には、初出本文から初版本本文への変更の際の関与があると考えられる。拙稿(2007)では前編のみの範囲から、「ぬ」→「り」への変更、「たり」→「り」への変更が目立つことを指摘した。また北澤尚・許哲(2009b)では、全編調査から「『けり→き』の異同も看過できない。」(p129)とし、さらに次のように指摘する。

「変更前」と「変更後」を比較すると、「変更前」には「ぬ」「たり」「けり」が頻用されていたのに対して、「変更後」では「り」「き」への交替が目だって多くなっている点も注目される。(p129)

『金色夜叉』に目立つ文末「り」「き」は初出の読売新聞が発表された後に、紅葉自身が初版本で変更したことによる結果ともいえる。

8. 『金色夜叉』からみた紅葉の文体

紅葉の言文一致体の調査を行った佐藤武義(2004)に次の指摘がある。

紅葉は試行錯誤による新文体の使用に常に懸念を感じていたため、次の『金色夜叉』執筆においては、敢然として「韻致」、余情の望める雅俗折衷体へと回帰してしまった(p156)

『金色夜叉』は、確かに言文一致体ではなく文語体あるいは雅俗折衷体と呼ばれる文体へと戻ることになった。しかし、本稿で調査した通り紅葉が以前書いていた文語体作品とは異なった傾向を示しており、佐藤武義(2004)いう「回帰」の実態は、以前執筆した文語体に戻りはしたが、その実質は同じ文語体とは言えない。その点においては「回帰」とは言えない面もある。むしろ、様々な文体を模索する中で『多情多恨』では「である体」を完成させ、試行錯

誤の結果『金色夜叉』の文体が生まれたと考えられる。それは紅葉の以前の文語体作品へ再び戻ったのではなく、新たな文体を生み出したといえる。その苦心の跡は読売新聞連載から単行本になる過程で紅葉自身が膨大な修正をしていることから窺える。このことは紅葉自身が「僕は言文一致以外にも、一種の文体で能く人心の機微を写すことが出来るだらうといふ野心で、実はこんな文体を創めて見たのだ。」⁷⁾という記述からも窺える。この試行錯誤の結果生み出された文体は、以前の文語体作品とは一線を画し、文末表現の観点からはむしろ言文一致体『多情多恨』と質的に重なる傾向すら窺えるのである。

本稿は文末表現から文体を明らかにしようと試みたが、紅葉という「個」の文体の一端を明らかにしたまでである。これが明治期の他の作家とどの程度一致するのか、また本稿は文学作品を資料としたが、いわゆる明治普通文と呼ばれる明治期の実用的な文章とどのように繋がるかまでは明らかにできなかった。しかし、岡本勲（1980）¹⁹⁾がいうように、紅葉も明治時代を生き、文体を模索し、言文一致体「である体」を確立させ、文体史上に大きな役割を担った人物である。紅葉の文体を明らかにすることは、当時の文体の一端を知る手掛かりとなりうる、またその可能性があると考えるのである。

注

- 1) 飛田良文（1992）は、紅葉の「である体」について「この影響は大きく、硯友社同人はいうまでもなく、二葉亭四迷・山田美妙もこれにない、新進の小杉天外・田山花袋・島崎藤村・泉鏡花にも用いられた。」（p652）と指摘する。
- 2) 『金色夜叉』は「雅俗折衷体」「和漢混和体」、『伽羅枕』『三人妻』は「西鶴模倣体」などと称されることがある。しかし本稿の調査資料の調査範囲である地の文は全て「文語体」である。そこで本稿では一律「文語体」と称することにする。
- 3) 『二人比丘尼色懺悔』冒頭の「作者曰（さくしゃいはく）」では次のように記されている。「文章は在来の雅俗折衷おかしからず。言文一致このもしからずで。色々氣を揉みぬいた末。鳳か鶏か一虎か猫か。我にも判断のならぬかゝる一風異様の文體を創造せり。」
- 4) 岩波書店『紅葉全集』10巻 p69
- 5) 但しこの期間にも文語体の作品も発表されている。しかし、一人称小説『不言不語』を除き、短編小説であり以前のような一定量を持つ文語体小説は発表されていない。
- 6) 『金色夜叉』は、本文の問題について既にいくつかの指摘が見られる。最も早い例として、塩田良平（1941）があり、初出の読売新聞本文と初版本の本文が異

なっていることを取り上げ、初版本は「文學的價值が高くなつてゐることは争はれない。」(p578)と指摘する。しかし具体的な異同箇所を網羅的に取り上げてはおらず、その異同の実態は明らかではなかった。拙稿(2007)では前編のみではあるが具体的にその異同を取り上げた。助詞、助動詞、動詞、音便等の異同をあげ、その量の多さを実態として示し、また塩田良平氏校訂の『金色夜叉』本文(塩田本文)の問題点を指摘した。北澤尚・許哲(2008)(2009a)では、『金色夜叉』全編の異同について、送り仮名、表記も含めた全ての異同をより網羅的に取り上げ、広範囲の異同を具体的に指摘されている。その異同の数は膨大である。北澤尚・許哲(2009b)では助動詞の異同に絞り、異同の数値を具体的に示している。助動詞に関わる異同が全360箇所見られることを指摘し、さらに「地の文における助動詞の異同が294例見られ、全体の81.7%を占めており、異同の大半が地の文に集中していることもわかる。」(p126)との指摘がある。

7) 岩波書店『紅葉全集』10巻 p318

8) 本稿は言文一致体完成以前の文語体『伽羅枕』『三人妻』『男ごゝろ』『心の闇』を調査資料としたが、これら4作品を取り上げた理由は次の通りである。

4作品と同時期に発表された文語体小説であっても、短編小説は除いた。また一定量のボリュームを持ちながらも一人称小説は除いた。その他に例えば『浮木丸』(M26)は文語体であり、岩波全集の頁数からみても量的にボリュームはあるが、「」で括られた会話文が多く、地の文を調査したところ、総文末数が127と少量であるため、本稿の具体的な考察には含まなかった。以上を除き、一定量のボリュームをもちながら『金色夜叉』と同様に読売新聞連載小説のものは上の4作品だった。

9) 『金色夜叉』本文について、塩田良平(1941)が次のように指摘する。「紅葉が單行本にまとめるに當つて、字句に相當に修正を加へたからであつて、従つて、本文史の上からいへば單行本の方が更に作者の藝術的意志に近づいてゐるわけである」(p578)

10) 初出の読売新聞は、『明治の讀賣新聞』(CD-ROM 読売新聞社メディア企画局データベース部)によって確認した。

11) サ変動詞は「見物す」(『伽羅枕』)、「案内す」(『金色夜叉』)のような例で、『金色夜叉』は「行かんとす」といった「む(ん)とす」の例がサ変16例中10例見られる。

12) この「ぞかし」について、木坂基(1988)では「指定的強勢用法で読者に最も近く向かうのは「ぞかし」である」とし「もともと「ぞかし」は、中古の物語・日記作品の中の、対話・独白部分にあらわれて、相手や自分に上接の叙述内容を強く指示する文末形式である。この聞き手に直接働きかけてゆく対話性が西鶴な

どに生かされて、読者に近づいた語りの表現形式を生むことになる。」(p140)と指摘がある。また『たけくらべ』の調査から「現実世界（人物・風俗）の動作状態を事実叙述するときの強指定」、「判断叙述における強指定」に使用されていることを指摘する。(p140)

- 13) 木坂基（1988）では、樋口一葉作品の文末調査から「き」「けり」について次の指摘がある。「作品によって偏りがある。まず「き」を用いない作品は比較的「けり」を多用する。『花ごもり』『大つごもり』『うつせみ』などがそれである。逆に「けり」を用いない作品または「けり」の少ない作品は比較的「き」を多用する。『ゆく雲』『にぎりえ』『十三夜』『たけくらべ』『われから』などの後期作品がそれである。」(p137)と指摘する。

- 14) 動詞に直接「き」が接続する例。次の4例である。

「語りき」(『伽羅枕』p18)

「勉（つとめ）き」(『金色夜叉』p178)

「初めき」(『金色夜叉』p228) 初出の読売新聞では「初（ひそ）めき」とルビが振られている。

「被（かうむ）りき」(『金色夜叉』p272)

- 15) 本間久雄（1943）は紅葉の文体を次のように分類している。

第一 西鶴模倣體

第二 雅文體

第三 言文一致體

第四 和漢混和體

「第一は彼れの初期のものであり、『色懺悔』以来『伽羅枕』『三人妻』などに見られるものであり」(p394)としており、本稿で取り上げる『伽羅枕』『三人妻』は第一の西鶴模倣体ということになる。『金色夜叉』については第四の和漢混和體に分類している。

- 16) 但し、長友千代治（1993）では「これら語法上の問題は、西鶴本にその例が顕著に見受けられることを指摘しているのであるが、西鶴本だけに特有な現象ではなく、広く元禄期とそこに至る近世初期の問題としての理解も必要である。」(p232)とする。

- 17) 拙稿（2007）、北澤尚・許哲（2009b）。

- 18) 例えば明治21年から22年にかけて発表された『風流京人形』は会話部分が《 》で区切られているが、文末は『金色夜叉』のように、時の助動詞が多く見られない。また、明治22年に発表された、『やまと昭君』は会話と地の文が分けられており、会話は《 》で区切られている（岩波全集の場合）。そして、地の文は文語体、会話文は口語体で『金色夜叉』と同様である。しかし『やまと昭

君』には『金色夜叉』に見られるような「り」の多用、複合助動詞の多用は見られないのである。本稿で取り上げなかった他の資料の文体については別稿を用意したい。

- 19) 岡本勲（1980）「作家の個性的文章と雖も、その時代の一般的な文語のありようを基層に持ち、その上に花咲いたものであると言えよう。こう見れば、一見、特定作家の筆癖と見られるものも、その時代の文語としての、例えば、完了の助動詞の使分けについての意識の潜在的要素が反映したものである可能性があると思う事になる。」（p384）

【参考文献】

- 岡本勲（1980）『明治諸作家の文体』笠間書院
- 岡本勲（1982）「明治普通文の「たり」と「り」」（『中京大学文学部紀要』第17巻1号）
- 木川あづさ（2007）『『金色夜叉』における新聞初出と初版本の本文異同について』（『実践國文學』71号）
- 木坂基（1988）『近代文章成立の諸相』和泉書院
- 木坂基（1976）『近代文章成立に関する基礎的研究』風間書房
- 北澤尚・許哲（2008）『『金色夜叉』本文の国語学的研究—前編・中編について—』（『東京学芸大学紀要人文社会科学系Ⅰ』59）
- 北澤尚・許哲（2009a）『『金色夜叉』本文の国語学的研究Ⅱ—後編・続編・続々編について—』（『東京学芸大学紀要人文社会科学系Ⅰ』60）
- 北澤尚・許哲（2009b）『『金色夜叉』本文の助動詞の異同について』（『日本近代語研究5』近代語研究会編 ひつじ書房）
- 木谷喜美枝（1973）「尾崎紅葉の初期文体—言文一致への過程—」（『国文目白』第12号）
- 近藤瑞子（2001）『近代日本語における用字法の変遷—尾崎紅葉を中心に—』翰林書房
- 佐藤武義（2004）「デアル体の文章—尾崎紅葉の作品を中心に—」（『国語論究 第11集 言文一致運動』飛田良文編 明治書院）
- 塩田良平（1941）『尾崎紅葉全集』（第6巻「解題」 中央公論社）
- 徳田秋声 田山花袋（1914）『明治小説文章變遷史』文学普及会
- 土佐亨（2005）『紅葉文学の水脈』和泉書院
- 中里理子（2002）「尾崎紅葉の言文一致文—「多情多恨」を中心に—」（『上越教育大学研究紀要』第21巻第2号）
- 長友千代治（1993）「西鶴の方法1—語法・文体・表現」（『西鶴を学ぶ人のために』

世界思想社)

服部隆 (2004) 「言文一致論の歴史」(『国語論究 第11集 言文一致運動』飛田良文
編 明治書院)

飛田良文 (1992) 『東京語成立史の研究』東京堂出版

本間久雄 (1943) 『続明治文学史』上巻 東京堂

松崎安子 (2008) 「明治期の文学的文語文の類型」(『国語学研究』47)

山本正秀 (1965) 『近代文体発生の史的研究』岩波書店

【調査テキスト】

『紅葉全集 2 巻』(『伽羅枕』) 岩波書店 (1994年 7 月21日)

『紅葉全集 3 巻』(『三人妻』) 岩波書店 (1993年11月22日)

『紅葉全集 4 巻』(『心の闇』『男ごゝろ』) 岩波書店 (1994年 1 月26日)

『紅葉全集 7 巻』(『金色夜叉』) 岩波書店 (1993年12月21日)

『紅葉全集 6 巻』(『多情多恨』用例引用のみ) 岩波書店 (1993年10月21日)

〔付記〕

本稿は、第262回近代語研究会における口頭発表をもとに、大幅な加筆、修正したものである。発表に際し、多くの諸先生方にご教示を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。

(きかわ あづさ・実践女子大学大学院博士後期課程)